
ゼロの使い魔 ～復讐するは我に有り～

Nay

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 ～復讐するは我に有り～

【Nコード】

N2020U

【作者名】

Nay

【あらすじ】

神様の暇つぶしでいつの間にか転生させられ、チート能力を無理矢理押し付けられたオリ主によるゼロの使い魔の原作破壊物語。アンチ貴族ですが、状況次第では貴族であっても取り込みます。目標はヴァリエール家一家全員の滅殺。他、トリステインのバカ貴族への天誅。とりあえず、主人公側の勢力拡大の為、色々と動き回ります。

序章：復讐の幕開け（前書き）

プロローグです。次回以降主人公の能力やら、現状の勢力など細かい説明をしていきます。今回はプロローグと言う事で簡単に……。

序章：復讐の幕開け

初めましての方は初めまして。

そうでない方は、おはこんばんちわ。

ラウルと申します。

数えで十歳です。

僕の実家は<トリステイン王国>という国の<バルト家>という子爵家でした。

領民に対しても頗るいい政治をしていまして、税金も安く、何より父と母の人柄もありまして非常に活気のある領地でした。

しかし、その活気に満ちた領地を妬んだのか、はたまた平民に対して寛容な扱いが気に食わなかったのかある大貴族がいちゃもん付けてきました。

その結果父と母が投獄されてしまい、二人は処刑され家は没落してしまいました。

僕自身も危うく殺されそうになったのですが、色々と機転を利かせ僕はなんとか脱出し、今では一人で暮らしています。

まあ、普通ハルケギニアにおいて十歳児が一人暮らしなんて出来るはずないんです、が！

実は僕は<転生>というモノを体験しておりまして……。

転生前は三十路目前の年齢でしたので、今現在の同年代の子供に比べては老成していると思います。

では何故に<転生>という体験をしているかと申しますと、僕自身では望んでいなかったのですが所謂<神>を自称する愚か者が居まして、そいつの暇つぶしの為に現世で肉体を消滅させられ有無を

言わずにこのハルケギニアに送り込まれたと言っ訳です。

しかもその際勝手に特典だ〜とのたまって、僕に色々な能力を付加していったようです。

ぶっちゃけた話、付加された能力を使えば一人でハルケギニアを滅ぼせます。

でも僕自身は目立つのが嫌いです。

なのでハルケギニアを滅ぼすような事はしません。

ただ、以前に敵対していた貴族……これは<トリステイン王国>の準王家に当たる<ヴァリエール家>なんですが、これについては、きつちりと報復する予定です。

その為僕は貴族に恨みを持つ平民や没落貴族をこれから集め、徹底的にヴァリエール家を叩く予定です。

ええ、一人も残さずに徹底的に殺りますともさ！

現状はまだ準備の段階ですが、既に何人かヴァリエール家や貴族に恨みを持つ人と接触を持っています。

勿論接触する際に十歳の格好のままではまともに接触する事は出来ません。

そこであの<神>とやらが付加していった能力の一つが役に立ちます。

所謂メタモルフォーゼといった感じでしょうか、声、姿形、記憶、その他諸々あらゆる部分が変身対象と同じになるんです。

しかも変身している間も僕自身の記憶と意識ははっきりしています。

なのでこの能力を使い、色々な人々と接触をしています。

接触するといっても、ただ話ただけでは正直信用はされないで

す。

なので、接触し問題が無さそうな相手であれば僕の実力の一旦を見せています。

何せハルケギニアには存在し得ない＜科学＞を見せるのですから、相手も大分驚きます。

その上で＜科学＞の力がどれ程のモノかを知らしめる事で、大概の場合話しに乗ってきます。

まあ、それだけ各人の恨みが強いという事なんでしょうけど。

接触を果たした人達も、何れは全員を一同に介して新勢力として旗揚げするつもりです。

どのような形になるかはまだわかりませんが、少なくとも今のハルケギニアの貴族連中よりはマシであらねばと心に誓っています。

それと接触した中で幾人が凄い人達がいて、まず傭兵に身をやつていた『オレリア』さん＜自称二十三歳の女性＞。

彼女もヴァリエール家の息の掛かった貴族により、実家が没落に追い込まれたそうです。

僕と似た境遇です。

なお、魔法に関してはトライアングルクラスで、剣技や格闘術に優れた方です。

しかもそのオレリアさんは傭兵団を結成しているらしく、そのまま傭兵団を丸々雇う事になりました。

次に『セドリック』さん＜四十代の紳士的なお髭のおじさん＞は、元々商人だったらしいのですがヴァリエール家の長女により彼の実家が扱う商品が気に食わないとの理由で、商人ギルドから追放されてしまいまともな取引が出来ず一家離散となってしまうたようです。その際、娘さんが＜トリステイン王国＞の＜モット伯爵＞という貴族に持っていかれたらしいです。

噂で聞きましたが、どうもそのモット伯爵というのは気に入った娘を手籠めにして飽きたら捨てるらしい。

恐らくセドリックさんの娘さんももう……。

このように僕の周りに集まった方々は少なからずヴァリエール家やその他の貴族に反感や恨みを持っています。

ので、この方々と協力しヴァリエール家、ひいてはそれに組する貴族や敵対する貴族等々を徹底的に排除していきます。

恐らくはハルケギニアの歴史が変わるでしょうけど、別に知った事じゃありません。

僕自身はあのく神>という存在により規格外な力を持ちましたが、所詮一人の人間です。

救える者など高が知れているでしょう。

なので僕は僕の周りに居る大事な人を守る事に専念します。

今ではセドリックさんやオレリアさん、それに傭兵団の人達や他の方々は僕にとっては大事な家族ですからね。

さて、では今日も張り切って人材の確保にいそしむといたしましたし
よう。

何時かあのヴァリエール家を叩き潰すその時まで……。

第一話：会合（前書き）

なかなか文章書くのは難しいですね。上手い具合に纏められません。今後悩みそうですが、のんびりやっていきます。

第一話：会合

あの日……ハルケギニアでの父と母が処刑された日、あの時に見たヴァリエール家の面々の顔。

今でもまぶたに焼き付いて離れない、あの醜悪極まりない顔。

何時か必ずあいつ等に復讐してやる……待ってて下さい、父さん、母さん。

貴方たちの敵は必ず取って見せます……。

「ふう、またあの日の夢ですか……嫌なものですね……」

何度と無く見てきたあの日の夢。

潔白であるはずの父と母が連行され、処刑されたあの日。

僕はヴァリエール家、いいえ、この世界そのものに復讐を誓いました。

目下のところはヴァリエール家が狙いですが、何れは貴族全てをこの世界より排除したいです。

そうでなければ苦しむ人々は絶える事が無いでしょうし。

その為にも頑張らなければなりません。

「そういえば、今日はオレリアさん達が来る日でしたね。準備して

おかないとまた弄られてしまいますね。」

オレリアさんやセドリックさん達とは、定期的に集まり会合を開いています。

その際オレリアさんは僕をよく弄ります。

姉のような人なので別段悪い気はしないのですが、周囲の生暖かい目が非常に居た堪れないのです。

加えてオレリアさんは、何故か僕を鍛えたがるのでちよくちよく剣術の稽古を受けています。

僕らの成そうとしている事を考えれば必要な技能ですので勿論真剣に取り組んでいます……十歳の子供相手にやるような訓練では無いと思う次第です。

稽古を受けた日と次の日は、筋肉痛で体中がガタガタですからね。もう少し優しくして欲しいと少しばかり思う今日この頃。

変わってセドリックさんは髭がダンディなおじさんなので、あまり僕を弄るような事はないのですが、それでも僕を息子のように思ってくれているみたいです。

それにセドリックさんからは色々と商売関係の事で教わっています。

僕は生前というか、転生前は工学系の人間だったので商売系はからつきしです。

なのでセドリックさんの授業は非常に面白いです。

こちらもちらで授業中は、結構な鬼教師っぷりを発揮してくれます。

課題を渡されたりするのですが、その量が半端では無いので結構苦心しています。

まあ、これも僕らの成すべき事への布石と考えればさほど辛くは無いですけどね。

それともう一人、僕らの仲間となった人で『オーレリー』さんという女性がいます。

オーレリーさんはセドリックさん経由で僕らの仲間となってくれました。

主に食事関係や家事関係で頑張ってくれています。

ぶっちゃけ、彼女の食事は僕の楽しみの一つです。

凄くおいしいんです…… なんとかお袋の味といったところでしょうか。

ご本人も恰幅のいい妙齡のご婦人ですし、凄く親しみ易いのです。

オーレリーさんが仲間になる際に聞いた事なのですが、オーレリーさんご自身は普通の農民だったそうなのです。

が、しかし、たまたま村に視察に訪れていた貴族に旦那さんと息子さんを無礼打ちにされてしまったそうです。

その結果、お二人は亡くなってしまい、オーレリーさんご自身も片足を失ったそうです。

今すぐにでもその貴族を亡き者にしたい位ですが、今のところは我慢の子です。

ちなみに、オーレリーさんの片足については僕の実力の一つであるく物質生成くを使い最高級の義足を作ってあげました。

今では何の問題も無く生活しています。

ちなみにですが、僕が暮らしているのはハルケギニアの東方にあるくサハラくと呼ばれる砂漠地帯です。

ここにはハルケギニアの人間が恐れるエルフの集落が存在する為、ハルケギニアからの人の往来はほとんどありません。

なので隠れ家としては絶好の場所です。

加えてこれは今後の事にも関わりますが、僕らとしてはエルフと敵対する意思は全くありません。

何故かと言うと、皆さんとも幾度と無く話し合い決まった事ではありますが何れは国を設立しようと考えています。

その為の土地として、このサハラの一部を使いたいと考えています。

故にエルフと敵対する事は、僕らにとってはデメリットでしかないのです。

まあ、僕的能力を使えばエルフであっても簡単に殲滅は出来ますが、別段エルフや亜人は僕らの討伐対象ではありませんし。

ですので、これからのハルケギニアの為に、エルフや他の亜人とは友好的に暮らしていける国を作りたいと考えています。

とはいえ、その前に先ず現在のハルケギニアを席卷している悪徳貴族や悪徳神官、それとブリミル教の教えそのものを排除しなければなりません。

正直な話、ただ排除するだけであれば僕的能力を使えば直ぐなんでしょうが、それでは今までと何も変わらない。

やはり今の世に生きる人々の力を持つて世の中を変えなければ。

その為にも、僕らは多くの仲間を必要とし、また、大きな力を必要としています。

何れ必ず……。

「ラウル坊、皆集まってるよ、早く顔洗って降りて来な」

「あ、はい、今行きます」

オーレリーさんは僕の事を「ラウル坊」と呼びます。

あの人なりの親愛を込めた呼び方なのだと思いますし、あのよう

に呼んでいただけると僕としても凄く親しみ易いので嬉しいです。
言ってみればオーレリーさんは僕にとっては第二の母親みたいな方ですね。

そういえばセドリックさんは、何故か僕の事を「坊ちゃん」と呼

びます。

何でもそう呼ぶのがしつくり来るんだそうです。

僕としては少し気恥ずかしい感じがするのですが……まあセドリツクさんがいいと言っているのもそのままにしています。

オレリアさんの僕の呼び方は、<ラウちゃん>です。

何だか女の子のような呼び方なので、微妙に勘弁して頂きたいのですが……言っても聞いてくれません。

というか、余計に弄られます。

なので最近は諦めています。

まあ、悪気は一切無いですし可愛がってはくれているのでいいんですけど。

さて、余り遅くなるとオーレリーさんに怒られそうですし、早めに行くとうしましょう。

《《《居間》》》

居間に到着すると、オレリアさんとセドリツクさん、それにオーレリーさんに傭兵団の副長さんが来ていました。

今日はこれといって重要事項は無かったはずなんですけど……何かあったのでしょうか？

「副長さんがここへ来るのは珍しいですね」

「おや坊ちゃん、久しぶりだねえ、元気だったかい」

「はい」

この人も僕の事を坊ちゃんと呼びます。

というか、傭兵団の中には僕の事を坊ちゃんと呼ぶ人が多いんですよね。

まあ、確かに子供ですしいんですけど……あまり広まるのはいかなものかと思う次第で。

「でも、何故に副長さんがここに？」

「ちよつと伝えておかないといけない事があってねえ」

「？」

「何でもヴァリエール家の連中が坊ちゃんに賞金を掛けたみたいだね」

「……僕にですか、というか何故奴らは僕が生きている事を知ったのでしょうか」

「恐らくは接触した人間の誰かが密告したんだろうねえ」

「ふむ、そうですか……まあここに居る以上奴らは手出し出来ないでしょうけど」

「そうなんだがね、一応念の為さ」

「わかりました、ありがとうございます」

賞金ですか、そこまでしてバルト家を根絶やしにしたいのですね。まあいいでしょう、来るなら来いです。

それにここには常時僕が作った護衛が存在しています。

はつきり言えば、メイジでは勝てない相手ですから問題はありません。

とはいえ絶対という事は有り得ませんし、何かしらの策を弄してくるとも限りません。

慢心せずに十二分に注意しておくしましょう。

「そうだ、丁度いいですから今後の方針について少しお話させて頂きたいのですが」

「方針？」

「ええ、僕らの最終目標は新しい国を建てる事にありますが、正直今のままでは政治や経済などを動かす為の人員が居ません。ですので今後はこういった知識のある平民の方々に接触すべきだと思うのですがいかがでしょうか？」

「確かに必要な事ではあるね。でも、平民だけだとやっぱり知識量は足りないだろうからあたしみたいに没落した貴族とかを囲い込むのがいいだろうね。特にトリステイン辺りじゃそういったのは大勢いるだろうし、ゲルマニアなんかも結構派閥争いとかで没落しているのは多くいるからね。」

「ゲルマニアですか……あそこも皇帝によって大分酷い粛清があったらしいですね」

「ああ、ほとんど虐殺に近い状況だったみたいだよ」

ゲルマニアも自由の国を謳っている割に、平民に対する圧制は苛烈を極めると情報を得ています。

中には多少マシな扱いをする貴族もいるようですが、本の一握りですし、それでも他から比べればマシ程度のようなのです。

実際にゲルマニアに行った事は無いですし、現状を自分の眼で確認した訳では無いですが恐らくはほぼ間違いないと思います。

何れはゲルマニアもターゲットになる事ですし、今の内から色々情報は集めておきましょう。

「それとですね、近い内にエルフと接触を持ちたいのですが、どうでしょうか？」

「エ、エルフだって?!」

「ぼ、坊ちゃん、流石にそりゃ無茶つてもんだ!」

やっぱり歴戦の傭兵であるオレリアさんや副長さんですらエルフは恐れますか。

しかし、エルフとの同盟はある意味では避けて通る事が出来ない

道。

ならばこそ早い段階から同盟を結んでおき、何かの時に背後を突かれないにすべきでしょう。

まあ、交渉については僕とセドリックさんが行く事になると思いますけど。

「ですが、このサハラを領有するのであれば避けて通る事は出来ないでしょう。それに僕らは別にエルフと敵対する訳じゃありません。このサハラに国を建てる事について理解を求めに行くだけです。」
「し、しかし、相手はエルフだし……果たしてこちらの話しが通じるかどうか……」

「亜人とは言えちゃんと言葉が話せて心があるなら別段話し合いをするのには問題は無いですよ。まあ、最悪戦闘になっても勝てる自信ありますしね。」

「……例の坊ちゃん的能力ってやつですかい？」
「ええ、あれを使えば正直な話、僕一人でもハルケギニアを滅ぼせます。とはいえ、それをするつもりは一切ありませんけど。」

そうなんですよ、僕に付加された能力の一つであるく物質生成くを使って核ミサイルやらなんやら、トンデモ兵器を量産してしまえばハルケギニア程度なら一人で制圧出来てしまいます。

しかしそれでは何も意味が無い。

やはり、ハルケギニアに生き、現在もなお虐げられている人々が立ち上がってこそ革命というものは意味を持つと思います。

なので僕は自分だけで復讐を成し遂げようとは考えなかったのです。

僕の復讐は、力なき人が力ある者を打ち倒すという、ハルケギニアの常識を覆し革命の狼煙となるべき第一歩ですから。

………

僕の考えを改めて話したところ、皆さん賛同してくれました。

エルフとの交渉については、僕とセドリックさん、それとオレリアさんで行く事にしました。

副長さんにおいては、僕らが交渉に出向いている間の傭兵団の取り纏めと、各地の情報集め、それから貴族に恨みを抱いている人間で仲間になっても問題なさそうな人間に関する情報を集めて貰います。

とはいえ、色々と準備もありますから今すぐ交渉に向かう訳ではありません。

暫くの間は勢力を拡大させる為に、人員確保と資源確保等に奔走する予定です。

ちなみにヴァリエール家に対しては、当面の間は静観を決め込みます。

こちら側の経済的準備が整い次第、物資の輸送やらをストップさせ先ずは経済的に圧力を掛けます。

その際、圧力を掛けているのが僕らである事がある程度わかり易くしておきます。

そうして奴らがそれに乗って来たとき……僕有能力で作り出した軍事力によりトリステインに侵攻、即時殲滅します。

あの国自体はほぼ有って無い様なものですし、潰れたところで問題は無いでしょう。

王室も不要ですし、この際ですからあの国は潰します。

その上であの国にいる平民の方々は僕らの方で引き取り、僕らの今いる辺りを中心として国家を樹立します。

今のところは予定としてはこのような感じですが、色々と反発もあるでしょうしなかなか計画通りには進まないでしょう。
ですので、下準備は入念に行う予定です。

天国にいる父さん、母さん、待っていて下さい。

お二人の敵は必ず討ち取ってみせます、僕の命に掛けて……。

第一話：会合（後書き）

今回もほぼ主人公視点で終わりました。

設定については、次回あたりにでも出そうと考えております。
主要登場人物のほとんどがオリキャラばかりですが……。

ちなみにヒロインは一人です。

誰になるかは聡い方ならもうお分かりだと思いますのであえて言いません（キリッ

では、また、次回もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2020u/>

ゼロの使い魔 ～復讐するは我に有り～

2011年6月21日00時40分発行